



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

## 視覚科学

横澤一彦

視覚系の情報処理能力はわれわれの行動にとって非常に重要なもので、高度に発達しています。このような視覚情報処理過程について、認知心理学の立場から解説しました。視覚を含むさまざまな行動をいきなり脳機能で説明することを欲する社会の傾向から、科学的根拠が希薄にもかかわらず、安易な拡大解釈がメディアで繰り返されていますが、本書では視覚研究で得られた知見をできるだけ正確に伝えたいと考えています。

視覚情報の入力から高次視覚に至る各過程の説明は、最近の研究

進捗を反映しています。注意やオブジェクト認知、情景認知は、日本語の書籍ではまとめて取り上げられることが少なかった分野です。また、狭義の認知心理学研究に限定せず、学際的研究を積極的に数多く取り上げることによって、認知心理学的アプローチの色褪せることのない重要性を伝えたいと思います。

専門課程で学ぶべき認知心理学の教科書、理工系の視覚科学関連の教科書、視覚研究者のための手引書として本書が利用されることを望んでいます。



著 横澤一彦  
発行 勁草書房  
A5判 / 260頁  
定価 本体 3,000円 + 税  
発行年月 2010年2月

よこさわ かずひこ  
東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は認知心理学（注意、共感覚、感覚融合認知などの統合的認知研究）。東京工業大学大学院修了後、NTT基礎研究所、ATR、東京大学生産技術研究所、南カリフォルニア大学などを経て、現職。一貫して高次視覚の研究に取り組み、注意やオブジェクト認知に関する論文多数。

## 成人の心理学

世代性（ジェネラティヴィティ）と人格的成熟

丸島令子

中年期の心理社会的発達課題「ジェネラティヴィティ」がエリクソンによって提唱されて久しい。この「生み出し、育む」意味をもつ発達課題を成人の全人格的成熟として捉えた漸成論的生涯発達論には多大の関心が寄せられてきたが、わが国での研究は寡少である。本書は、成熟社会とみられる欧米におけるこのテーマについての文献的・理論的考察とともに、実証研究に取り組み、方法論の第一歩に概念構築をして「世代性」と呼び、3因子（世話・世代継承性・創造性）を導き、多要素

的意味内容を把握した。この3因子を基盤に、研究ツールとして「世代性関心」と「世代性行動」の二つの尺度を開発し、世代性の発達要因を探った。すると成人にとって世代性の関心と行動は関連しており、中年期のみならず老年期にも発達することが判明した。性や年齢による発達の相違がみられる一方で、個々成人の精神健康状況は、世代性と成人のパーソナリティ成熟との関連性の説明要因として注目され、悪影響を及ぼす世代性の暗部の負の側面を次なる課題として認識し、検討している。



著 丸島令子  
発行 ナカニシヤ出版  
A5判 / 204頁  
定価 本体 2,800円 + 税  
発行年月 2009年12月

まるしま れいこ  
元神戸女学院大学人間科学部教授。専門は臨床心理学、発達心理学、家族研究。著書はほかに、『臨床心理学を基本から学ぶ』（共編著、北大路書房）、『家族：この人間にとって本質的なもの』（共編著、同文書院）、『境界例の娘をもつ母親との面接過程』（京都大学教育学部紀要）など論文多数。



## 新編社会心理学 (改訂版)

堀 洋道

監修 堀洋道  
編著 吉田富二雄・松井豊・宮本聡介  
発行 福村出版  
A5判 / 296頁  
定価 本体 2,800円＋税  
発行年月 2009年12月

ほり ひろみち  
筑波大学名誉教授、大妻女子大学名誉教授。  
専門は社会心理学。  
著書はほかに、『ハンドブック 社会化の心理学』（分担執筆、川島書店）、『特集 日本人の対外国態度』（分担執筆、至誠堂）、『現代社会と子ども』（分担執筆、朝倉書店）など。

本書を初めて世に出したのは、1997年6月。早いもので、あれから13年の歳月が流れた。初版出版当時は大学院生だった若い執筆者もいたが、今では立派な研究者・教育者へと成長し活躍している。この間、社会心理学という学問もめざましい進歩を遂げた。13年という歳月は、改訂版となる本書を出版する多くの理由をわれわれに与えてくれた。

本書は「個人内過程」「対人行動と対人関係」「集団」「社会心理学の研究手法」の4部から構成されている。トピックを精選し、

研究の進め方の具体的記述を心掛けたということは初版と変わらない。しかし改訂版では、初版にはなかった新たなトピックを本文中やコラムで積極的に取り上げている。「自己と文化」「潜在的態度」「メディアコミュニケーション」「ソーシャルサポート」などが新たに加筆されたトピックの例である。

本書は大学での「社会心理学」の受講者を想定して執筆されているが、社会心理学に興味をもった一般の読者にもお読みいただけることを願っている。



## T式カップル言語連想法

治療的会話の継続と展開のツールとして

十島雍蔵

著 十島雍蔵  
発行 ナカニシヤ出版  
A5判 / 130頁  
定価 本体 2,500円＋税  
発行年月 2010年6月

としま やすぞう  
志学館大学大学院教授、鹿児島大学名誉教授。  
専門は臨床心理学、家族システム療法、福祉心理臨床学。  
著書はほかに、『家族システム援助論』（単著）、『心理サイバネティクス・シリーズ』（単訳・共訳）、『童話・昔話におけるダブル・バインド』（共著）、『発達障害の心理臨床』（共著）（いずれもナカニシヤ出版）など。

「彼一語 我一語 秋深みかも」（虚子）——そうか、二人で深い情感を共有しあうのに、一語で十分なんだ。

T式カップル言語連想法とは、セラピーにおける複雑な治療的会話の流れを極端に単純化し、あたかも禅問答でもするかのようになり、冗長な言葉をとことん削ぎ落とした単語で行う会話のことです。俳諧の連句にもちょっと似ています。問題をめぐって、クライエント・セラピスト双方のところに渦巻くいろいろな深い思いが一つの単語に凝縮されて、交互に表現さ

れます。一連の連想が終了した後で、それを発した時、「何を考え、どう感じていたか」という内面の思いについて語り合う「リフレクティングする会話」を行います。その会話が治療的会話に発展することを願いながら。その発想の理論的背景として、オートポイエシス・モデルとナラティブ・アプローチが基盤にあります。

本書は、この技法の実際のやり方とその背景をなす理論について、臨床事例を添えて報告したものです。